

Title	シャー・ アッパースI世のギーラーン地方政策(一)
Sub Title	The administrative policy of Gilan by Shah 'Abbas I
Author	長谷部, 暢子(Hasebe, Nobuko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1990
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.59, No.4 (1990. 12) ,p.29(381)- 58(410)
JaLC DOI	
Abstract	During the reign of Shah 'Abbas I (1588-1629), the Safavid government adopted a local policy that made regions of rich production xasse, namely they were placed under the direct control of the central government. The royal treasury received all of the revenues from the xasse lands. Thus, this policy was conceived as one of general financial policies of the Safavids. Parts of the district of Gilan, south of the Caspian Sea, were appointed as xasse in 1597. Since then, they were retained under the administration of a vazir who was a civil officer dispatched from the central government. Gilan was famous for its production of rice and raw silk, and one of the most affluent districts in the Safavid Iran. And the district that was not within Safavid's effective control till conquered by Shah 'Abbas I. Before that the influence of the local political power had been very strong. In the course of operation of the xasse policy in Gilan, Shah 'Abbas I thoroughly reduced its local military powers, and has taken various measures to make Gilan a district which would be major incomesupplier for royal treasury. Consequently the administration of vazir showed a tendency to concentrate on reinforcement of collecting taxes rather than activating local economy, and eventually brought oppression and extortion to local society. In addition to the fact that xasse policy had a structural defect that led to severe extortion of local population, destruction of the existing local ruling system bore various social contradictions in the Gilan society. Against this oppressive policy, local people of Gilan start a popular movement immediately after the death of Shah 'Abbas I, and showed offensive reaction to reject the Safavid rule. This movement was soon put down without any effect to the Safavid policy in Gilan. On the contrary, the central government further strengthened its policy toward it. This movement indicates the defects and cotradictions originated from the local policy of Shah 'Abbas I, which has been reputed as successful in modern historical researches. And this reaction of the Gilan people well reflects Shah 'Abbas I's reign and his policy from a different perspective.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19901200-0029">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19901200-0029</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# シャー・アッバースI世のギーラーン地方政策(一)

長谷部 暢 子

はじめに

十六世紀初頭から二世紀余りイランを支配したサファヴィー朝は、第五代のシャー・アッバースI世(在位一五八七—一六二九年)の時代に最盛期を迎えた。彼の一連の政策のうち、従来の研究において最も高く評価されているのは、近衛兵勢力を新設あるいは増強<sup>(1)</sup>して、それまで国政を左右していたキズイルバシュ諸部族の勢力を大幅に削減<sup>(2)</sup>しえたことである。しかし、シャー・アッバースI世の対キズイルバシュ政策のみが強調されている感<sup>(3)</sup>は否めず、彼の政策を様々な側面から考察する試みが十分になされているとはいえない。

筆者にそうした問題意識を抱かせたのは、フーマニー('Abd al-Fattāḥ Fūmanī) 著『ギーラーン史』(Tarīx

e Gilān)<sup>(4)</sup>(以下TGFと略記)なる地方史史料であり、さらにはそこに見出された「ハーッセ化」という地方政策であった。TGFは、第二代シャー・タフマースプI世と西ギーラーン地方政権との間に朝貢関係が開始された一五一七(九二三)年から、アッバースI世の没年である一六二九(一〇三八)年までの、サファヴィー王朝とギーラーンとの関係史をカヴァーする同時代史料である<sup>(5)</sup>。施政者への献呈を目的として書かれたものではないため、シャーの統治に対する批判・不満が臆さず記されている点<sup>(6)</sup>、また、作者が在地の財政・会計業務に携わる者であったため、地方の統治機構とその変容に関する記載がかなり詳細に見出せる点などが、この史料の特徴と言えよう。本稿では、このTGFに現われた「ハーッセ化」に注目し、アッバースI世の対ギーラーン政策の在

り方および地方統治機構にもたらされた変容、それに対する地方社会の反応について検討してみたい。

なお、TGF以外に使用した主な史料とその略号は以下の通りである。

TAA Eskandar Baig Torkamān, *Tarix-e 'alam . ara-ye 'Abbāsi*, (ed. I. Afšār), 2vols., Tehrān, 1972,

DhTAA —————, *Dheil-e Tarix-e 'alam . ara-ye 'Abbāsi*, (ed. S.X<sup>v</sup> ānsāri), Tehrān, 1939.

TA Jelāl Monajjem, *Tarix-e 'Abbāsi*, B. M. Add. 27241.

XS Moḥammad Ma'sūm Eṣfahāni, *Xolāsat al-Siyar*, (ed. I. Afšār), Tehrān, 1990.

JM Moḥammad Mofid Baḡi, *Jame'-e Mofidi*, (ed. I. Afšār), 3vols., Tehrān, 1962-64.

XT Qādi Aḥmad Qomi, *Xolāsat al-Tavārix*, (ed. E. Eṣraḡi), 2vols., Tehrān, 1984.

TM Sami'a, *Tadhkerat al-molūk*, (facsimile, ed. of B. M. Or. 9496, with Eng. tr. & com. by V. Minorsky), London, 1943.

# 一 アッバースI世期の

## ハーッセ化政策の特徴

まず、「ハーッセ」に関して若干記しておこう。イランの土地制度用語としてのハーッセ (xāṣṣe) は、王領地あるいは支配者の私有地を指すといわれる。サファヴィー朝時代のハーッセに関しては、従来は仏人旅行者シャルダン (Chardin, J.) の言に基づいて第六代のシャー・サフイーI世 (在位一六二九—四二年) 時代以降明確にトュール<sup>(9)</sup>体制下にある土地と区別されるようになり、ある地域の統治を知事 (ハーケム) に委ねず、ハーッセ地として中央政府の管轄下に置く政策が取られるようになったものとみなされていた。<sup>(10)</sup>しかしレールボルン (K. M. Röhrborn) は、ペルシア語史料中にこの考えを裏付けるものが見出せないこと、さらに地方をハーッセ地として中央政府の直轄下に置く政策を取り始めたのがアッバースI世であることを呈示した。また彼は、サファヴィー時代でも、アッバースI世時代以前にはハーッセの語は「同じく「王領地」を意味するハーレセ (xāleṣe) とほぼ同義に用いられていたが、アッバースI世時代には、ハーレセは廷臣などへの小規模分与地を、ハーッセ

表I シャー・アッバースI世時代以前のハーッセ地(～1587年)

地 域	期 間	備 考	典 拠	統治者に関する記載
Tabrīz	1534～ 1578	Hoseyn Xānのヴァズィールの所領をハーッセに Amīr Xān Mouṣlūがハーケムに	XT946, 948 TAA227	ダールーガ ★1559-1673(XT235)
Qazvīn	1534～ 1576	Hoseyn Xānのヴァズィールの所領をハーッセに Masīb Xān Tekkelūのティュールに	XT946, 948 XT627	ヴァズィール統治の記載(TAA166)
Esfahān	1534 ～ 1587	Hoseyn Xānのヴァズィールの所領をハーッセに (シャー・タフマースプに次ぎHamza Mīrzā, 次にAbū Ṭāleb Mīrzāのハーッセ) Moršed Qolī Xānのティュールに	XT946, 948 TAA381  TAA381	ヴァズィール統治の記載(XT996)
Kāśān	★1559～ 1576	ヴァズィールのĀqā Kamāl al-Dīnが統治  Ebrāhīm Mīrzāのティュールに	XT570, 996 TAA163, 165 XT630	左記に同じ
Yazd	★1558～ 1586	ヴァズィールのMohammad Šarīf Tehrānīが 統治(Esfahānと兼任) Kermānのハーケムが占領	TAA165 JM3-1 167 TAA254	左記に同じ
Semnān Damāvand Xazārjarīb Xabālūd	1577～ 1579 1587 1588	Xeyr al-Nesā Beygomのハーッセに Semnān ティュールに Xazārjarīb, Xabālūdティュールに Damāvand ティュールに	XT665, TAA228 XT699 XT869 XT874	

★は最低限この時期はそうであったことを示す

[Qazvin]

表II シャー・アッバース I 世時代のハーッセ地 (1587~1629年)

年	任命職	統治の担い手及びその史料記述	出自	典 拠
1588	ハーッセ化	一部がハーッセに定められコルチ達に分配された	Q	TA45a-b, TAA399
1589	ダールーガ	Parvāne Baig (ハーッセであると明記されている)	G	XT889
1591	ダールーガ	Qarā Ḥasan Soltān Čāvašlū (Ostājlū)	Q	XT1087, TA89b
1592	ダールーガ	Jamšīd Baig	G	TAA449
1594	ダールーガ	Šeyx Aḥmad Āqā Šaraflū Ostājlū	—	TAA497-8
1603	ダールーガ	Amīr Kūne Xān Qājār	Q	TAA638
1603~	ヴァズィール	Mīrzā ‘Ālamīyān (=Moḥammad Šafrī)(~1609)	—	TGF180
1606~	(ヴァズィール)	Oslān Baig Šāmlū	Q	TGF181
1612	ダールーガ	Salmān Xān Ostājlū (シャーの従兄)	—	TAA853, TGF198

[Esfahān]

1589	ダールーガ	Farhād Baig (Morsed Qolī没後よりハーケム任官なし)	G	XT895, TAA418
1589	ダールーガ	Moḥammad Baig Sārūyčī	—	TAA401
1589	ダールーガ	Yūlī Baig	G	XT891, TAA418
1590	ダールーガ	Yūlī Baig	G	XT903, TA73b, TAA426
1590	ダールーガ	‘Alī Baig Ostājlū	—	XT907
1591	ダールーガ	Farhād Baig	G	TA78b
1597	ダールーガ	Qādī Soltān Torbatī (Torbatにティユール保有)	—	TAA568

[Kāšān]

1588	ハーッセ化	dastūr-e xāṣṣe-ye šarīfeと記されている		XT874
1589	ダールーガ	Behzād Baig (シャー・イスマーイールII時代からのダールーガ)	G	XT889
1604	ヴァズィール	Moḥammad Zamān Baig	—	JM3-1 182-3

[Yazd]

1587	ヴァズィール	Xāje 'Alī Baig	—	TA48a
1589	ダールーガ	'Alī Qolī Xān Šāmlū	Q	TA57a, 58a, TAA403
1590	ダールーガ	Soheyī Baig	—	TA63a
1591	ダールーガ	Šāh Xalīl 'Allāh b.Mīrmīrān	—	TAA431, JM3-1・66, 70
1595～	ヴァズィール	Yāzī Baig	—	JM3-1・176
1596	ダールーガ	'Alī Qolī Xān Šāmlū (再任、Abarkūhにトユール有)	Q	TAA525, TA126a
1606	ヴァズィール	Mohammad Zamān Baig (Kāšānを兼任)	—	JM3-1・183
1623	ヴァズィール	Mīrzā 'Anāyat Allāh Eṣfahānī	—	JM3-1・189
1625～	ヴァズィール	Mīrzā Xalīl Allāh	—	JM3-1・190

[Qom]

～1589	ハーケム	Hoseyn Xān Šāmlū (彼のヘラート着任後ハーケムなし)	Q	XT889
1597	ヴァズィール	X <sup>v</sup> āje Masīh (まもなく免職となった)	—	TGF235

[Māzandarān]

～1595	ハーケム	Farhād Xān Qaramānlū (彼のホラーサーン出発後ハーケムなし)	—	TAA518-9
1597	ハーッセ化	Nūr地方をハーッセ化	—	TA125b
1606～	ヴァズィール	Mīrzā ‘Ālamīyān (代理; Mīr al-Qāsem Xorāsānī)	—	TGF181
1616	ヴァズィール	Mīrzā Taqī (1629年～ギーラーンも兼任)	—	TAA1093

[東Gilan-Biye Pīš]

～1592	ハーケム	Xān Aḥmad Xān	—	TGF134, TA95a, TAA450-1
1592	ハーケム	Mehdī Qolī Xan Šāmlū	Q	TAA451
1593	ハーケム	Dervīš Moḥammad Xān Rūmlū	—	TAA467, TGF167
1594	ハーケム	Farhād Xān Qaramānlū	—	TGF156
1597	ハーッセ化	(Farhād XānはXorāsānへ)	—	TGF172

1597～	ザラスィール	Mirzā 'Ālamīyān	—	TGF172
1609～	ザラスィール	Behzād Baig	—	TGF188
1612	ザールーガ	Šāh Vīrdī Baig (～1614)	—	TGF207-8
1614～	ザラスィール	Mirzā Taqī Eṣfahānī	—	TGF209
1616	ザールーガ	Ouliyā Baig Kurd (～1618)	—	TGF215
1618～	ザラスィール	Mirzā Taqī Eṣfahānī (復職)	—	TGF215
～1628	ザラスィール	Mirza 'Abd Allāh	G ?	TGF222, XS51
1629	ザラスィール	Mirzā Taqī Eṣfahānī (Māzandarānも兼任)	—	TGF223

〔西Gilan-Biye Pas〕

～1594	ハークム	'Alī Xān	—	TGF142, TAA4.60, TA97b-98
1594	ハークム	Farhād Xān Qaramānlu	—	TGF157
1597	ハーツセ化	Mirza 'Ālamīyān	—	TGF172
1597～	ザラスィール	Behzād Baig	—	TGF172
1609～	ザラスィール	Laṭīf Xān Baig (～1614)	—	TGF188
1612	ザールーガ	Oṣlān Baig Sāmī	—	TGF207-8
1614	ザラスィール	'Alī Qolī Baig Soleymānxānī (～1618)	Q	TGF209
1616	ザールーガ	Oṣlān Baig Sāmī (復職)	—	TGF215
1618	ザラスィール	Mirzā Esmā'īl (Oṣlān Baigの息子)	—	TGF215
1627	ザラスィール	Mirzā Taqī Eṣfahānī	Q ?	TGF221, XS50
1629	ザラスィール	Mirzā Taqī Eṣfahānī	—	TGF223

出自のQはコルチ、Gはゴラームを示す。また任命職の(ザラスィール)はザラスィール代理を指す

は、トュール分与対象外の比較的広大な中央政府の直轄地を指すようになったことも指摘した<sup>(11)</sup>。確かに彼が示す通りハーツセは、アッバースI世時代にいわば支配者個

人の「私有」の枠を出て、より公的な、国家あるいは中央政府に直接帰属する性質のものに変容したと考えられるのである。

ここで、アッバースI世期のハーッセの特徴を検討してみよう (cf. 表I, II)<sup>(12)</sup>。アッバースI世時代以前のハーッセに関して言えば、たとえばエスファハーンの例などに見られるように、支配者であるシャーのみならず、王族のハーッセが存在する。こうしたハーッセについても、統治担当者<sup>(13)</sup>としては、中央政庁 (dīvān-e a'la) 派遣のヴァズィールの存在が認められる。従ってこうした王族に帰属するハーッセは、その土地収入が王族個人の私的収入になっていたものと考えられる。ゆえにアッバースI世時代以前のハーッセは、王族の「私有地」的な傾向が強かったと言える。これらは、アッバースI世時代の、シャーただ一人の名において比較的大規模な地域を中央直轄領化していく、政策性を持ったハーッセとは明らかに異質であった。

こうした政策としてのハーッセ化の端緒をアッバースI世時代に置いたという点ではレヨールボルの見解は画期的であった。<sup>(14)</sup>しかしアッバースI世のハーッセ化政策採用の目的として、キズイルバシュの地方駐屯軍勢力の弱体化のみを強調する彼の結論は、一面的な解釈であると思われる。<sup>(15)</sup>

さて、ハーッセ地からの税収はすべて国庫に納入され

るものであったため、その統治においては、当然財政・徴税面が重視されていた。それゆえハーッセ地の統治は、ヴァズィールに<sup>(16)</sup>任命された中央政庁の文官が行っていたが、それに加えて、中央政庁から統治・徴税を請負う職と思われるダールーガ (dārūga)<sup>(17)</sup>も任命されていた。アッバースI世時代のハーッセ統治の最大の特徴は、表IIに見られるように、このダールーガについての記載がヴァズィールに関する記載よりも遙かに多いこと、またその担い手の大半を占めていたのが、アッバースI世が常備軍として重用したとされるゴラーム<sup>(18)</sup>およびコルチ出身者<sup>(19)</sup>だったことである。ゴラームとコルチは、確かにキズイルバシュ諸部族勢力への武力上の全面的依存を打開すべく重用された集団であったろう。しかし表IIに示したように、ハーッセ地統治に関して検討した限りでは、比較的同一の集団ないしは部族が同一地域のダールーガ職を担う傾向がかなり顕著に見られる。中でもガズヴィーンにおける<sup>(20)</sup>Ostila部、ヤズドにおけるSamli部のごとく、当時のキズイルバシュ有力部族出身のコルチたちが次々とダールーガ職に就いていた点に注意する必要がある。つまりハーッセ化政策が、地方部族勢力の拡大ないしは土着化を阻止すべく採用されたとは



考えるに、レヨールボルンの考察には、統治勢力に関する詳細な分析が欠如している。アッバース一世の対キズイルバシュ政策におけるゴラームとコルチの問題については本稿では詳しく触れないが、このゴラームとコルチがハーッセ統治に大きく関与していた点を、対キズイルバシュ政策とのみ捉えていたのでは、アッバース一世のハーッセ化政策の意味の十分な説明は難しいことをここで指摘しておきたい。

むしろ注目すべきは、アッバース一世がハーッセ地の統治において、ゴラームやコルチをダールーガに任じて徴税強化の担い手としたこと、さらにはそうして国庫に集めたハーッセの収益を彼らの増強のために運用したことである。<sup>(21)</sup>つまり、ダールーガとしてのゴラームやコルチの存在は、ハーッセ化が王朝軍増強と国庫収入増を目指す財政政策の一環であったことを明示しているのである。

また、新たなハーッセ地の設定は、領土の拡大に対応した形で行われていた。たとえば表Ⅱに示したように、一五九七年にゴムがハーッセ化された際、元ハーケム Hoseyn Xān Sāmī<sup>(22)</sup>は、この年新たに征服されたヘラートのハーケムになった。<sup>(22)</sup>つまり、有力ハーケムを新し

い領土のトゥール保持者に転任させて前線の軍備を強化する一方、経済的な重要性の高い地域のトゥール分与を止め、中央直轄領として徴税強化の対象にする、という仕組みになっていたのである。ハーッセ化政策は、アッバース一世期の強兵政策の財政上の基盤であり、その結果獲得された領土がさらにハーッセ化政策を推進させていたといえよう。

## Ⅱ ギーラーン地方のハーッセ化

1 ヴァズィール統治・ハーッセ体制への移行およびその理由

ギーラーンは、一五九七／一〇〇六年、アッバース一世によってハーッセとされた。TGFにはそれが次のように記されている。

① ヒジュラ暦一〇〇六年シャー・アッバースは、東西両ギーラーン(Gilānāt)をハーケムたちやトゥール保持者のトゥールから削って(vad 'namūde)ハーッセとし(xāšse karde), Mirza 'Alamiyān(=Mirza Mohammad 'Safi')が…(中略)…ギーラーンのヴァズィールの職務(vezārat)と統治(hokūmat)を「行うよう」定めた。<sup>(23)</sup>

この記述が示すように、ハーッセ化により、ギーラーンではトゥール保有が撤廃され、ハーケムではなく、ヴァズィールに統治が委ねられた。この統治機構上の変容について、若干考察を加えておこう。アッバースI世時代のハーッセは土地収入のすべてが国庫に入る中央直轄領であったため、ハーッセ化の後、すべての官職保有者は俸給のみを受け取るようになる。TGFによれば、一五九七／一〇〇六年、アッバースI世は Kāmran Baig Toulami なる者を従者に取り立てた際、ヴァズィールの Mohāmmad Šafī' に対し、Toulam の地 (olkā-ye Toulam) の収入 (madāxel) を Kāmran Baig Toulami の永代トゥール (toyūle abadi) にせよとの勅令 (ragam) を発した。しかし Mohāmmad Šafī' は、ハーッセである西ギーラーン (Biye pas)<sup>(25)</sup> にトゥール保有はありえないとシャーに上申した。そこでシャーは改めて「西ギーラーンの官吏たち (‘ommāl) は、Toulam の地税 (vo-juhāt) のうち、毎年四〇〇トマンを Kāmran Baig の年俸 (vaje-ye mavājeb) として渡すべし」との勅令を出した。<sup>(25)</sup> この事例の Kāmran Baig に見られるように、地方政庁を通した俸給という形を取らぬ限り、ギーラーンの税収入からの受益はありえないのである。そし

て Mohāmmad Šafī' が初めの勅令に異議を唱えたのは、彼がギーラーンをハーッセとして統治すべく命じられており、かつ自らを頂点とする地方政庁が統治・徴税の実務を担っていたためなのである。

さて、先にダールーガ職の重要性が高いのがアッバースI世時代のハーッセ統治の特徴であると述べたが、ギーラーンの場合はやや状況が異なる。TGFには、通常ヴァズィールのみが、中央政府任命の統治の担い手として現われる。<sup>(26)</sup> またダールーガが中央政府から派遣されたという記述は僅かに二例見出されるのみで、<sup>(27)</sup> 逆にヴァズィール自身がダールーガを任命したという記述がしばしば見られる。<sup>(28)</sup> この点において、ギーラーンに敷かれたハーッセ統治は他のハーッセ地に対するそれとは明らかに相違がある。ハーッセ化とは、元来財政管理強化を目的として、整備したシステムによる文官統治を敷く措置であろう。とすれば、ギーラーンはより本来的な文官統治の徹底されたハーッセ地であったということもできよう。しかし、他とは明らかに違う形の統治が敷かれるようになったのはなぜか。これについて考えるためには、ギーラーンの特殊性に注目する必要がある。

ギーラーンは、アッバースI世時代に、名実共にサフ

アヴィー朝の地方州とされた。それ以前ギーラーンは、東西それぞれのハーケムを頂点としたトゥール体制の下に統治されていた。<sup>(29)</sup> それらのハーケムとは、サファヴィー中央政府がトゥールを与えたキズイルバシュの武官ではなく、ギーラーン地方土着の支配者たちであった。むしろタフマースプ I 世時代には、名目上とはいえ東西ギーラーン共に、サファヴィー朝のシャーとの間にトゥール体制に基づく君臣関係を結んでいたし、また一時的にサファヴィー朝の支配が強化されたこともあったが、<sup>(31)</sup> 統治権そのものがギーラーン地方土着の支配者たちから奪われたことはなかった。つまり地方独立政権として、サファヴィー朝とはいわば朝貢関係にあったのである。

しかしアッバース I 世が即位してギーラーン征服が行われるとこの状況は一変する。一五九二年七月一六日／一〇〇〇年 *Savval* 月五日に東ギーラーンが征服され<sup>(32)</sup> *Mehdi-Qoli Xān Sāmī* に<sup>(33)</sup>、また一五九四年三月一日／一〇〇二年 *Jomada II* 月一七日に西ギーラーンが征服されると<sup>(34)</sup> *Farhād Xān Qaramānlū* に<sup>(35)</sup>、それぞれトゥールとして与えられた。つまりアッバース I 世による征服の後、ギーラーンは一時期キズイルバシュ武官のハーケムたちの統治下に委ねられたのである。T

A によれば、東ギーラーンのハーケム *Xān Ahmad* が贈り物 (*hadiye*) を献上するため *Xalī Baig* なる者を大使 (*ilci*) として遣わした際に、シャーはこの *Xān Ahmad* の独立政権然とした態度に激怒したという。<sup>(36)</sup> つまりアッバース I 世の対ギーラーン政策は、当初から彼以前のシャーたちのそれとは異なっていたのである。

征服の後、確かに実質的「地方州化」がなされたが、中央政府がキズイルバシュのハーケムを統治者にしたのみで、ギーラーン統治機構の形態は依然としてトゥール体制の枠を出なかった。統治機構の変容をもたらしたのは、一五九七／一〇〇六年のハーッセ化である。もっとも、この「征服」および「地方州化」という事象は、サファヴィー朝がギーラーンに対し、他とは違った統治を敷くことになった要因を考えさせる。すなわち、ギーラーンには強力な地方政権が存在し、名目上は臣下としての契約を結びつつも地方政権としての独立性を維持し続けていた。この点においてギーラーンは、王朝創建後間もない頃からサファヴィー朝の領土であったガズヴィーン、エスファハーン、カーシャーン、ヤズドなどとは明らかに性質の異なるハーッセ地であった。

アッバース I 世のギーラーン征服については、サファ

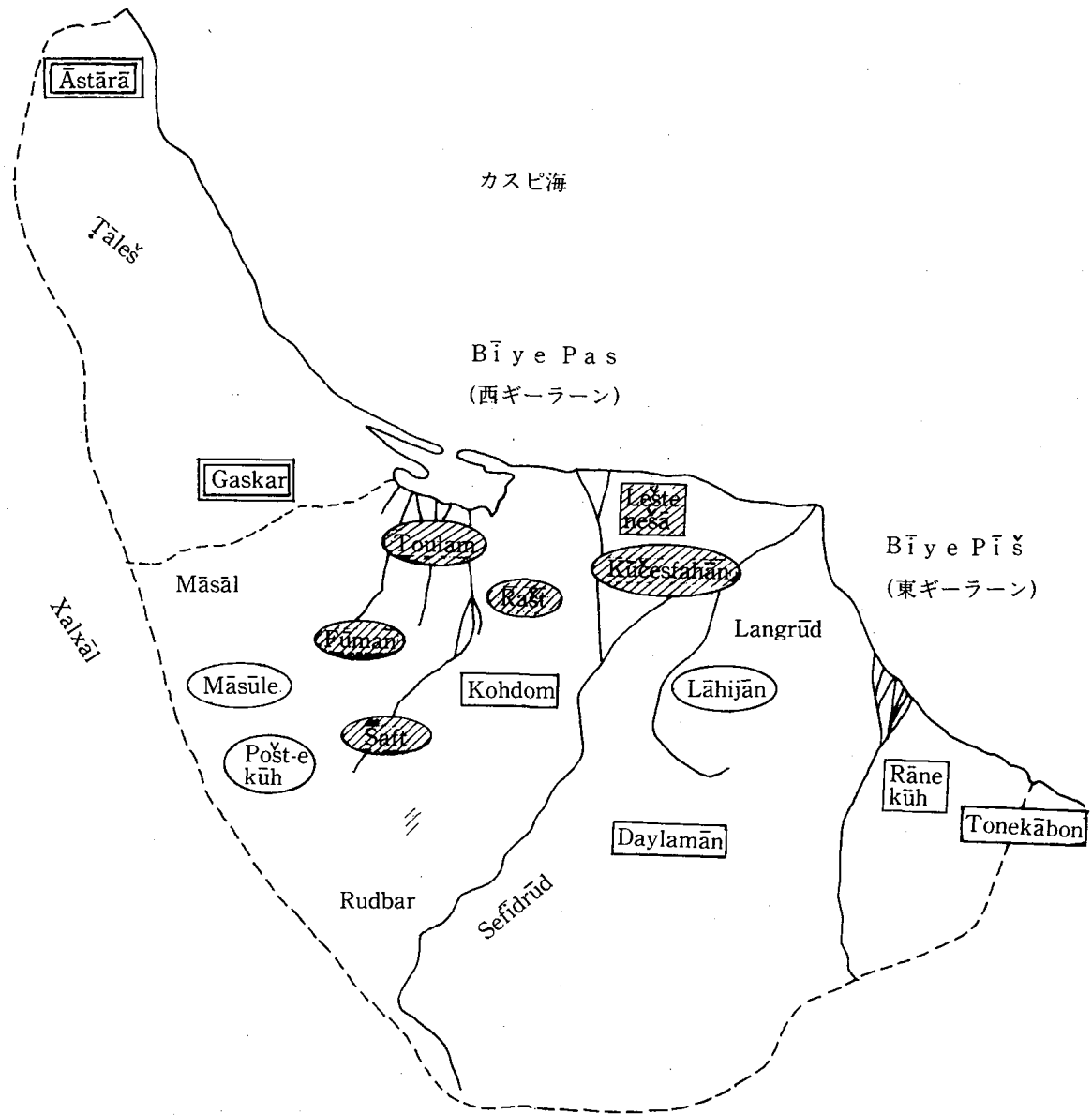
ヴィー朝によるギーラーン支配の正当性の意識<sup>(37)</sup>、ギーラーン統治者たちの不服従<sup>(38)</sup>、戦略的な必要性など様々な理由および動機の記載が史料に見出される。他方ハーッセ化という統治機構上の大きな変化に関しては、その理由はもちろんTGF以外の史料にはその事象すら記されていない。とはいえ、ハーッセ化の後財政管理強化を目的とした統治機構改革が行われたことに鑑みれば、その最大の理由が経済的な側面にあったことは容易に想定できる。西ギーラーン征服の契機となった、ハーケムの‘Ali Xānの反逆についてTAAには次のような記述が見られる。

② 彼(=‘Ali Xān)は金(nāl)や土地財産(aqar)の多さに慢心し…(中略)…不遜にも反逆し、服従「の道」から逸脱した。<sup>(40)</sup>

この記述から、アッバースI世が、不本意にも実質的な地方州として支配しえずにいたギーラーンの経済的重要性に注目していたことが窺える。ギーラーンの経済的重要性とは土地生産性の高さであり、中でも米および絹の生産地であったことである。沼地の多いギーラーンの平地は比類ない穀倉地帯であったし、サファヴィー朝の最大の輸出品であった絹、すなわち生糸の生産高が最も

多かったのもギーラーンであった。こうした地域に半ば独立した地方政権が存在していたは、その経済的な利点を直接サファヴィー朝の国庫収入に結びつけることができない。ギーラーンの征服は、ハーッセ化を可能にするための必要条件であった。征服活動と統治機構の改革は、事象としては別個のものであったが、国庫にギーラーンの税収をもたらすことを最終目的としていたという点では、一連の措置と捉えられよう。年代記史料には、東ギーラーン征服の直後に当時の大ヴァズィール(vazīr-i ‘āzām)をはじめとした中央政府の成員たちがギーラーンに派遣されたという記述が見られる。<sup>(42)</sup>大ヴァズィール自らが赴いて徴税法の整備などを行ったという記述例は、管見の限り他の地域については全く見られない。このことも、ギーラーンがその経済的重要性ゆえに、ハーッセ化の対象として選ばれ、またアッバースI世時代のハーッセとしてはある意味で特殊とも言える徹底した文官統治の下に置かれるようになったことを示している。もっとも地図Iに示したように、現在のギーラーン州あるいはTGFにおいてギーラーンとみなされる地域のすべてがアッバースI世のハーッセ化の対象とされたわけではない。本稿でハーッセ統治下のギーラーンとして

地図Ⅰ ハーッセ統治下のギーラーンとハーケム統治地域



- …ハーケム統治・ティユール体制下にある地域
- …ハーケムは存在したが漸次ハーッセとされた地域
- …1597年にヴァズィール統治下に入ったことが確認しうる地域
- …うちハーッセ化の後にもセパフサーラルが存在した地域
- …ハーッセ化の記載はあるが実質的にはハーッセとみなしえない地域

論じることが限定された地域であることを、ここに記しておく。

さらにギーラーンのハーッセ化が時代にそった国庫増収の必要に依じてなされたことについても若干述べておこう。一五九七／一〇〇六年の冬、アッバースI世はエスファハーンへの遷都を敢行した。<sup>(43)</sup> さらに翌年(一〇〇六年)にタフマースプI世時代の旧領土をすべて回復する「ホラーサン大遠征」を行った。<sup>(44)</sup> つまりヒジュラ暦一〇〇六年とは、アッバースI世親政期のうちでも屈指の大事業となされた年であり、また即位十年にして漸く内政の安定を得て本格的な対外遠征に着手した、いわば転換点の年でもあった。その際に、国庫からの支出増大を賄う財政政策の一つとして、ハーッセ地を増やす方策をとったと考えられる。<sup>(45)</sup>

## 2 ハーッセ化による地方軍制の変化

### a ギーラーンの地方軍制

レヨールボルンは、ハーッセ地では専ら中央派遣の宮廷従者(Hofgefolgsleute)が軍務を担っていたとして<sup>(46)</sup>いる。しかし、ギーラーンの場合は、ハーッセ化の後に中央政府から地方軍務を担う何らかの勢力が派遣された

ことを示す記述は全く見られない。さらに、ギーラーンの地理的な特殊性を考慮すると、中央派遣の軍事勢力がハーッセ化以降のギーラーンの軍務を担った可能性は低いといえる。当時ギーラーンの平地は大半は泥沼であったし、山腹は深い森林に覆われていた。<sup>(47)</sup> この森林および山岳地が天然の要害をなしており、戦闘には特殊な知識と技術が必要であった。<sup>(48)</sup> また沼地では馬を有効に使用せず、乾燥地の戦闘とは全く勝手が違った。TGFには地方軍の助力なしには中央派遣軍の征服活動の遂行が難しかった状況が記されている。<sup>(50)</sup> つまり、乾燥地であるイラン中央部からの派兵によってギーラーンの軍務を行うことは、難しくかつ合理的ではなかったといえる。ゆえにギーラーンの地方軍備に関しては、現地の軍事勢力の存在を考察せざるをえない。

### b セパーフとライヤーム

TGFにはギーラーンの在地軍事勢力に関する記述が多いが、この史料で「地方軍」を指す語として用いられているのは、軍隊を示す *laškar* および *askar* を除くと、セパーフ(*sepāh*)とライヤーム(*layyām*)の二語である。

ハーッセ化以前、特にアッバースI世の征服以前のこ

の二語の記述の特徴を考察しよう。

- ③ Rānekūh のセパフサーラー (sepahsālār) Šah Malek は東ギーラーンのセパーフとライヤームのうち残っていた者たちを伴って Kučesfahān<sup>(51)</sup> に出動し、暴動を鎮圧した。

このように、この二語が並記される例が多く見られ、さらにそうした記述例の大半では、セパーフおよびライヤームは地方の軍務に携わる集団として示されている。軍事行動を取る以外には次のような記述例が見られる。

- ④ Ebrāhīm Xān は…(中略)…Rāst の町に滞在し、セパーフとライヤームおよび臣民たち (ra'āya) の心を安定させることに専心した。<sup>(52)</sup>

ここではセパーフとライヤームは地域住民集団の要素として示されているが、こうした記述例の場合、必ずこの二語の後に、一般の人々を表わす ra'iyat もしくはその複数形 ra'āyā の語が伴われる。つまりセパーフとライヤームは、地元住民の範疇に含まれるものの、完全には一般民衆と同一視されていない。すなわち、在地住民からなる地方軍事力集団として捉えられているのである。

次にこの二語を個別に考察しよう。まずセパーフと

は、軍団あるいは部隊を意味する。TGFのハーッセ化以前の記述例を見ていくと、この語が単独で現われる場合、いずれも地方軍務に携わる記述である。また前記のライヤーム以外で並記される語は 'askar, laškar などであり、この場合もセパーフは地方軍勢力として示されているといえる。また大抵の記述に地域名が付されるが、そうでない場合も地元のハーケムもしくはその臣下への帰属が示されている。以上の点から考えて、セパーフはハーケムに帰属する在地の兵団であろう。彼らが、ハーケムからトゥール・俸給のいずれを受けていたのかを示す記述は見出せない。またギーラーンの地理的特徴を考慮すると、セパーフを騎兵と断定することもできない。ゆえにギーラーンのセパーフは、ハーケムに帰属する在地の地方常備兵集団と捉えるのが適当であろう。

ところが、ハーッセ化以降 TGF にはこのセパーフの語の記載が全く見られなくなる。セパーフの強制的な解体を示す記述が見られるわけではない。しかしハーッセ化に伴ってトゥールとハーケムが撤廃されるため、セパーフを保有する存在も、セパーフが常時武装して軍隊機能を果たすための経済的基盤も失われる。またハーッセ化以後の統治を担ったヴァズイールが常備軍を有してい

なかった点に鑑みる<sup>(53)</sup>とギーラーンの地方軍勢力に対する縮小措置が全く講じられぬはずがない。つまり、組織としてのセパーフはハーッセル化以降存在しなくなったと考えられる。

次にライヤームについて考察しよう。レヨールボルン、パーヤンデフ<sup>(54)</sup> (M. Pāyandeh) などは、ライヤームを農民と解釈している。確かに管見の限りこのライヤームの語がギーラーン以外の事例で用いられることはないし、またTGFにおいて、ライヤームに付記された地名を見ると、いずれも平地、つまり耕作地帯に存在している<sup>(55)</sup>。ゆえにライヤームが農業に携わっていた可能性は高いといえる。しかし単に農民と解釈するのみでは不十分である。ライヤームが一般民衆とは同一視されず、地方軍備に携わる集団として示されている点を看過すべきではない。

ここでTAAに見出されたライヤームの記述例を援用して考察しよう。

- ⑤ 「東ギーラーンの征服活動終了後」ギーラーン軍の貴顕 (a'yān) のうちシャーに仕えうる者は、俸給 (navājeḥ va marsum) を定められ、王朝 ('asāker-e manšūre) 軍の列に叙せられた。そしてその他の

シャー・アッバースI世のギーラーン地方政策(一)

motajannade やライヤームは、いつも遠征が朝から夕方までかかり、また自分たちの住地 (maḥal va maqām) から離れられなかった<sup>(56)</sup>ので、自発的に喜んで農業 (ra'iyati) に戻った。

この記述例において、ライヤームと並記されている motajannade は、徴募された者を意味する。この motajannade の記述例をTAAにさらに検討すると、兵の臨時徴募が行われる際、金銭を与えられるなどしてその対象となった者、なりうる者について用いられる語であることが解る<sup>(57)</sup>。この motajannade と並記されるライヤームも、同様に臨時に集められる者という性格を持つと思われる。また平時は農業に従事する集団であることも示されている。

TGFにも銀貨や金貨 (deram va dinār) を与えてライヤームを集めたという記述<sup>(58)</sup>や、ライヤームのうち三〇〇人を選出して進軍させたという記述<sup>(59)</sup>が見出され、ライヤームが必要に応じて金銭を与えたり、選んだりして募る者たちであることが示されている。この他TGFには「ライヤーム層 (tabage-ye layyām) の者に無数の馬具や武器 (yarāq va asleḥ-e-ye bī šenār) を与えて進軍させた<sup>(60)</sup>」という記述が見出され、平時は非武装であっ



たことが解る。彼らは通常農業で生計を立てており、軍役の報酬を与えられることはあってもそれを生業としてはいなかった。すなわちライヤームは、ギーラーンの地方非常備農民兵たちと捉えられる。

このライヤームは、兵としてはいわば潜在的な存在であるため、ハーッセ化以後のTGFの記述にも存在が確認される。しかし、この語の指す内容自体は変わらないと思われるのだが、記述の性格に若干の変化が見られる。非常備兵の集団として行動を取る記述例が著しく減る<sup>(61)</sup>。一方、ライヤームの内の特定された人物つまり、ライヤームの長たち<sup>(62)</sup>、ライヤームの大物、信頼のおけるライヤーム<sup>(64)</sup>などと表現される人物の行動の記述が多くなる<sup>(65)</sup>。またライヤームの個人名や部族名が記される例も現われるのである。これらの特定された人物は、集団を代表する、何らかの形で傑出した個人と捉えられる。

さらにはハーッセ化以降 *Jayyām zāde* という語の記述が見られるようになる<sup>(67)</sup>。この *zāde* とは、ペルシア語で「誰某の息子、出身」を意味する。その *zāde* の語が付されるようになったのは、敢えてライヤームに所属する旨を示す価値が見出されるようになったことの現われではないだろうか。また、記述に値する行動をとる者が

ライヤームの範疇に入るようになったために、特定の人物に関する記述が目立つようになったとも想定できる。つまり、元はセパーフに属していた者たちがライヤーム化していったと思われるのである。この元セパーフはかつて職業軍人であったため、兵になりうる者のうちでも当然優秀な部類に属した。そしてハーッセ化以後、地位や官職を失い、軍務を専らに生計を立てていけない以上、彼らが農業に従事することも考えられる。むしろ平時武装してはいない。こう考えていくと彼らはライヤームの範疇に入る。かくしてライヤームに属する人間が増え、その内でも軍務能力を持つ元セパーフたちの代表的存在ゆえに、ライヤームの語に価値が見出されるようになったのではなからうか。

ハーッセ化以降、ギーラーンの在地軍事勢力の大半はいわば潜在的な性質のものになった。サファヴィー朝側がハーッセ体制下のギーラーンの地方軍事勢力を縮小させる意図を持っていたことはまず疑いない。

#### c セパフサーラル

地方政権時代、セパフサーラル (*sepahsālār*) はその名の通りセパーフの長であった。しかしハーッセ化によってセパーフ組織が消失してからも、この職は存在し

続ける。ゆえにこの職についても考察しておこう。

古来ギーラーンのハーケム位、すなわち統治権は、原則的に *Kiya* 家と *Eshāq* 家にあるものとされ、地方有力者たちはこれらの統治者との君臣関係においてより高位を占めるべく競っていた。<sup>(68)</sup> セパフサーラールはその対象となる顯職であり、ハーケムの臣下の内、武官を代表する存在であった。ハーケム代理を務める者もほとんどセパフサーラール職にある者たちの中から選ばれた。<sup>(69)</sup> セパフサーラールは東西ギーラーンそれぞれのハーケムによって各地区に任命され、当該地区のセパーフを統率し、各自の仕えるハーケムへの軍事奉仕を行った。また当該地区の領有権 (*dārā'i*) が賦与されていたという記述が見られ、<sup>(70)</sup> ハーケムとセパフサーラールはトュール体制に基づく君臣関係にあったと考えられる。そしてハーケムに仕える存在ではあっても、実質的な軍隊動員力を掌握していたのはセパフサーラールであった。<sup>(71)</sup>

アッバースⅠ世の征服が遂行される過程において、統治権は土着のハーケムからキズイルバシュの武官へと移行した。しかしその際にもセパフサーラールのみは地方有力者の中から選ばれた。彼らはシャーおよびサファヴィー朝派遣のハーケムとの間にトュール体制に基づく君

臣関係を持ち、<sup>(72)</sup> しばらくの間は軍隊指揮者としての機能を保っていた。<sup>(73)</sup> しかしこれは、彼らの持つ動員力を征服活動に用いるための暫定的な措置にすぎなかった。

セパフサーラールという官職の性格上の変化は、ハーッセ化に先立つこと四年弱、両ギーラーンの征服が完了した一五九四／一〇〇二年にまずその兆候が現われた。このとき西ギーラーン各地区、すなわち *Rašt*, *Fūman*, *Kūčsfahān*, *Saft*, *Toulam* についてそれぞれセパフサーラール職の任命が行われた。<sup>(74)</sup> 彼らはいずれも土着の有力者たちであり、各々王朝軍に対する協力を認められるなどして任命されたのである。注目すべきことはこの任官の記事にすべて俸給高が付されていることである。<sup>(75)</sup> これらの地区はいずれも一五九七／一〇〇六年にヴァズィール統治下に入ったことが TGF に明記されている。<sup>(76)</sup> そしてハーッセ化以降 TGF に現われるセパフサーラールは、すべてこの際に任命を受けた者たちである。しかしこの時点ではセパフサーラールはトュール保有者ではない。さらにハーッセ化を経るとセパーフは存在しなくなる。ハーッセ化の後、セパフサーラールはいかなる官職として存在するようになったのであろうか。

まず軍事行動に携わる記述は二例しか見出されず、そ

の内セパフサーラールが主体的に軍事行動をとったものは、一六〇三／一〇一二年の Kār Kiya Fatū<sup>(77)</sup> 反運動 庄時の一例のみである。この時ギーラーンのセパフサーラールたち、つまり運動のおこった Fūman を除く Rašt, Kūčestahān, Šaft, Toulam のセパフサーラールたちが「自らの部族の者 (aqvām) や、貴顕の人々 (akāber va a'yān)」、従者たち (molāzemān) を連れて「動運鎮庄に出動したという。彼らはこの時点ではまだ当該地域における動員力を保持していたといえる。しかし彼らが率いた鎮庄勢力を、軍務を専らにする集団とは限定できない。つまりセパフサーラールはセパーフの消失と共に、軍務を担うべき集団の長という性格を失っていたといえよう。そしてもう一つの例は、一六一〇／一〇一九年、ヴァズィールの Behzād Baig がアゼルバイジャンに進軍しようとした際のものである。

⑥ Behzād Baig は Lāhijān の貴顕 (a'yān) を連れて Rašt に来た。そして西ギーラーンの貴顕の人々 (akāber va a'yān) と共に Fūman に来、西ギーラーンのライヤームや地区長たち (ro'asā')、セパフサーラールたち (sepahsālārān)、庶民 (asāyer) を召喚するため伝令を送って多数を動員し…(中略)

… Āstārā に向かった。<sup>(79)</sup>

この記述に見られるセパフサーラールは、軍隊指揮を行う存在などではなく、動員される側の一要素にすぎない。さらに、セパフサーラールの個人名が記される例は減少し sepahsālārān と総称されるようになる。セパフサーラールという官職の重要性はハーッセ化以前に比べて著しく低下したといえよう。

そして軍事行動以外の記述例は大半がヴァズィールの随行員としての行動と考えられる。<sup>(80)</sup> その際にヴァズィールの身边警護を担っていたとしても、地方軍務の遂行とは捉えにくい。セパフサーラールはヴァズィールの下僚として現われるのみで、主体的に行動を取る例は見られなくなる。彼らはヴァズィールを通した俸給によって生計を立てる雇員となり、次第にその側近となった。そのためセパフサーラール職の担い手たちと地方社会の関係も、当然かつてとは違うものになった。

ハーッセ化以降この職を存続させた中央政府の目的は、地方社会に少なからぬ影響力を持っていた地方有力者の懐柔にあったと考えられる。かつてこの職の保有はトゥールや軍隊指揮権の保有を意味していたため、その官職授与は懐柔機能を果たすには有効だったであろう。

しかしトユールとセパーフが撤廃された後、セパフサーラールは名誉職と化した。

一五九四／一〇〇二年に任命されたセパフサーラールのうち <sup>(81)</sup> *Sat* 以外の地区の者たちについては後任者の任命記事が全く見られない。<sup>(82)</sup> *Sat* についても、一六一八／一〇二七年以降の担い手の記述は見出せない。<sup>(83)</sup> さらに一六二九／一〇三八年の動運の記述に至ると、もはやセパフサーラールに関しては一語の記載も見られなくなる。官職としての重要性が低下したために特記されなくなったとも、またヴァズィール統治が浸透し、敢えて元地方有力者を懐柔する必要がなくなったために任官そのものが廃止されたとも考えられる。いずれにせよこの職を存続させた中央政府の意図は、有力者たちをヴァズィールの雇員とすることで彼らの地方社会との関係を希薄化させ、影響力を失わせることにあったと思われる。つまりこれは、ハーッセ統治下の地方軍事勢力に対する徹底的な縮小措置の一環であったといえよう。

#### d ヴァズィールの軍事権

ヴァズィールの職務一般については後に詳述するが、あらかじめヴァズィールの軍事権について、ここで記しておく。

レヨールボルンは、ハーッセ地のヴァズィールは自らの統治に関わる危険のある際に限り、<sup>(84)</sup> 援軍 (*Hilfsgruppe*) を召喚する権利を持っていたとしている。しかしながら僅かに見出しえたヴァズィールの軍事行動に関する記述は、レヨールボルンが述べている以上に、ヴァズィールが軍事における権限を制限されていたことを示している。

たとえば、一六一〇／一〇一九年、二代目ヴァズィールの *Behzād Baig* が、アゼルバイジャンのヴァズィールと *Āstārā* の管轄を巡って争った際の記述がある。*Behzād Baig* は *Lahjān*, *Rāst*, *Fūman* に次々赴いて、貴頭の人々 (*akāber va a'yān*)、ライヤーム、地区長たち (*ro'asā*)、セパフサーラールたち、庶民 (*aṣṣayr*) などを多数動員し、さらにライヤームに武器を与えて進軍した<sup>(85)</sup> という。

前記のレヨールボルンの見解はこの記述を根拠としている。しかしこの事例を「援軍を召喚する権利」の行使と捉えるべきではない。この時の *Behzād Baig* の主張および進軍の動機は不当なものではなかった。自らが *Āstārā* と *Gaskar* のヴァズィール職を担う者として任命を受けていたからこそ、アゼルバイジャンのヴァズィ

ールの主張を不当なものとして行動を起こしたのである。<sup>(87)</sup>しかし彼はこの進軍のことをシャーに知られ、この「醜行」(‘amal-e šanī’)<sup>(88)</sup>を恥じて動員した三〇〇名と共にシャのー夏營地に赴き、五〇〇トマンの献上金(piskēs)を差し出してシャーに謝罪することになる。<sup>(89)</sup>この事例の帰結に特目したい。この行動がシャーおよび中央政府の側から「醜行」とみなされたのは、ヴァズィールの立場で軍事行動を取るのが越権行為だったためであろう。そして Behzād Baig が動員しえた勢力が、主にライヤームなど金銭を与えたり武器を供与したりして募る兵たちであったことも重要である。財政を扱うヴァズィールにとってこうした募兵は可能であったが、彼らはそれを行う権利を賦与されてはいなかったのである。そして募兵を行わなくては行動を起こせないことにも注目したい。さらに TGF には一六二九／一〇三八年の運動の際、ヴァズィールの Mirzā Esmā‘il が、自らの従者すなわちキャラントルや貴顕(a‘yān)と共に反乱軍に立ち向かおうとしたものの、もとより策に乏しくかつ戦いの習慣(‘adab-e jang)を知らなかったため、ついには逃亡するしか手立てがなくなるさまが記されており興味深い。<sup>(90)</sup>つまりハーッセ地のヴァズィールは常備軍を

有していなかったと考えられる。彼らに軍隊指揮権はなく、いかに自らの正当な権利が侵害されようとも、自ら軍事行動を起こすべきではないとされていたのである。レョールボルンは、この事例の帰結について、「宮廷からの命令(farmān)なしに進軍した」ためにシャーが非難したと説明している。<sup>(91)</sup>しかし常備軍を持たないヴァズィールに進軍命令が出されることなどありえない。正当な理由があり、ヴァズィールの統治の存亡に関わるような危機が生じた際には、別な集団に進軍命令が下ったと考えられるのである。

#### e ギーライン近隣地域のハーケム軍勢力

ハーッセ化以降のギーラインの地方軍務において、常に武装し、有事の際に主体となって軍事行動を取ったのは、一六二九／一〇三八年の Farīb Šah 運動の際に鎮庄にあたった Āstārā, Gaskar, Daylamān, Rānekūh, Lešte nešā, Kohdom, Tonekābon のハーケムたちの軍隊であった。

これらの各地区については、一五九七／一〇〇六年以降も従来のハーケムがその地位を保ち、その後も彼らと部族的・家系的に繋がりのある者たちが<sup>(92)</sup>統治を続けた。引き続きハーケムとして統治を担っていた勢力にいか

表Ⅲ ハーケム統治下にある近隣地域とその勢力（～1629年）

地域	支配勢力について	地域特殊性 への適合	ギーラーン征服 への適応	サファヴィー 王朝への協力	王朝軍遠征 への援軍	γarīb Šah 運動時
Āstārā	Ṭāleš(古来Gīlānに遍在 するイラン系山岳民族)	◎	抵抗(1512) 後 恭順	1599～	————	鎮圧軍指揮 (兵5000)
Gaskar	～1620 Ṭāleš	◎	協力するが 反乱者輩出	★1610～	1616年 (TAA893)	
	1627～ Činī(クルド系)	○	————	1627～	————	
Daylamān	1595～ Šūfī(クルド系)	○	協力(TGF165)	1595～	1606, 1608, 1609年	東ギーラーンの 騒ぎを鎮定
Rānekūh	古来Šūfī(11c～)	○	協力(TAA451)	★1592～	1596年	鎮左に参加
Lešte nešā	1596～ Činī (漸次ハーッセに移行)	○	協力(TGF171, TAA514-5)	★1596～	1609年 (TAA797)	————
Kohdom	Gīlānī	◎	協力(TGF165, TAA491-4)	★1593～	1616年 (TAA893)	鎮圧に参加 (兵1000)
Tonekābon	キズィルバシュ・ルームルーの 一氏族 Heṣārīlū	?	協力故の任命	★1595～	1625年 (TAA1036)	鎮圧に参加

★は最低限この時期はそうであったことを示す

なる特性があったのかを史料の記述から考察すると、次の点が挙げられる。

- (1) ギーラーン征服時、あるいはそれ以前からサファヴィー朝に対して服従を示しており、征服活動にも協力した。
- (2) サファヴィー朝軍の遠征の際に軍事奉仕を行いうる。
- (3) 古くからギーラーン地方に居住する部族によって構成され、ギーラーンという特殊な地域の軍務を担いうる。

前記の地域の統治勢力がこれらの点に各々どう当てはまるかについては付表Ⅲを参照されたい。これらはいずれもサファヴィー朝側から見て重要である点、および必要条件である。中でも、その地域的な特殊性ゆえにギーラーンの軍務を担いうる勢力はこれらハーケム軍以外になかったため、(3)は特に重要である。Lešīe nešā<sup>(93)</sup>を除く上記各地区のハーケム勢力が一六二九／一〇三八年の運動の鎮圧にあたったことはTGFをはじめ諸史料に明記されている<sup>(94)</sup>。さらには次のような記述も見られる。

⑦ Daylamān のハーケム Bīrām Qolī Soljān Mir Sufī は、〔平時〕Daylamān の山中にあって東ギ

ーラーンの首府 Lāhijān の暴動 (fetne) の監視 (harāsāt) を任されていた<sup>(95)</sup>。

また、Āstārā のハーケムと Gaskar のハーケムが、中央政府からの命令を受け取る以前に鎮圧行動に着手していたことを示す記述も見られる<sup>(96)</sup>。つまり臨時に近隣地域のハーケムたちの出動策が講じられたわけではなく、彼らは有事の際のハーッセ地域の軍務を任されていたのである。

そして、西ギーラーンのヴァズイールの要請によって Gaskar のハーケムが援軍を送ったという記述や、同様に東ギーラーンのヴァズイールが Tonekābon のハーケムと Daylamān のハーケムの許に援軍の派遣を依頼したという記述も見出される<sup>(98)</sup>。つまり、ハーッセ地ギーラーンのヴァズイールは有事の際にはこうした近隣のハーケム軍の軍事行動に依存するものとされていたのである。中央政府はハーッセ統治下の地域については軍事勢力の縮小を目指したが、イラン中央部からの派兵には無理があったため、近隣のハーケム統治地域はハーッセ化せず、ハーケムたちにハーッセ地の軍務を委ねた。地図Ⅰに見られるように、ハーケム統治地域は、ハーッセ統治下の地域をほぼ取り巻く形で存在しており、戦略的・軍

事的な側面が、ハーケム統治下に残る地域を決定したことを暗示している。また存続したハーケム勢力が侮りがない軍事力を有していたことも考えられる。つまりこうした地域までも武装解除してトユールを撤廃することは中央政府にとって不可能かつ非合理的であったといえる。それ以上に Tales, Çini, Süti<sup>(99)</sup> および Kohdom のギーラーン人勢力の軍事力なしには、ギーラーン地方のハーッセ体制の続行はもちろんハーッセ化自体不可能であっただろう。むしろそうした中央政府の意図のみではなく、他方のハーケム勢力の側も、サファヴィー朝との臣従関係を確立し、ハーッセ地の軍備をも担うことに何らかの利点を見出していた。たとえば論功行賞としての統治権の賦与、サファヴィー朝における官職の授与などがそれにあたるであろう。中央政府が一方的にハーケム勢力を置いた利用したのではなく、双方それぞれがハーッセ体制を維持することで利害の一致を見たのである。

ハーケム体制が存続したギーラーン近隣地域の統治は、Gaskar を除き全て同一地域について同一部族の者が担っている上、その内にはキズイルバシュ部族も存在した。<sup>(100)</sup> こうしたハーケム勢力の存続がハーッセ体制の維持に不可欠であった点に鑑みると、少なくともギーラー

ンのハーッセ化の目的は、キズイルバシュのハーケム勢力や部族主義による地方統治の撤廃ではない。ハーッセ化政策の目的は、統治体制改革そのものではなく、徴税強化にあった。そのためそれに最適なヴァズィール統治が施行されたのである。(未完)

## 註

- (1) コラーム(Çolām)の常備軍を新設した他、コルチ(qorçî)の近衛兵団を増強した。コラームおよびコルチについては註(18)および(19)を参照されたい。
- (2) サファヴィー朝の母体となったサファヴィー教団の信奉者として教主の下に集まり、建国の際に軍事力の中核をなしたトルコマン系遊牧民を指す。
- (3) たとえば H. R. Roemer, R. Savory などがキズイルバシュ勢力弱体化を強調する立場をとっている。その主張は; Roemer, H. R., "The Safavid Period", *The Cambridge History of Iran* vol. 6, pp. 189-350, Press Syndicate of University of Cambridge, New York, 1986, (pp. 264-5). 伊藤 昌彦, Savory, R., "Abbās I," *Encyclopaedia Iranica* I-1, pp. 71-75, Routledge and Kegan Paul, London, Boston and Henley, 1982. などに見られる。
- (4) 'Abd al-Fattāh Fūmani, *Tarix-e Gilan*, (ed., M.



Sorūde), Tehrān, 1971.

- (5) 作者フーマニーが二代目ヴァズィールの Behzād Baig と親交を持っていたさま (TGF p. 194) など、作者の動向がしばしば記されている。(cf. TGF p. 204, p. 266)

- (6) たとえば、アッバースI世は、ヴァズィールの Behzād Baig がギーラーン民衆の支持を受けていたことを不服として彼を罷免したことを暗示する記載 (p. 210) や、アッバースI世が冬の狩猟の際にわざわざ民衆を狩り出し、多数の凍死者を出しながらも、そのことには全く頓着せず、自らの愉樂を追求したという記載 (pp. 216-7) などが見られる。

- (7) この作品を書く時点では隠遁者となっていたが (TGF p. 5)、作者はヴァズィールの Behzād Baig が解任された際、会計監査を行うべくシャーの勅令を受けている (TGF p. 204)。

- (8) Chardin, J. *Voyage du Chevalier Chardin en Perse*, 10 vols., Paris, 1811. (以下 Chardin と略記) vol. 5, p. 250

- (9) サファヴィー朝下でとられていた土地下賜の一形態で、支配者が臣下にある土地の統治権および徴税権を与えるものである。

- (10) こうした解釈を示しているのはラムトン (Lambton, A. K. S.) やミノルスキー (Minorski, V.) など。

(cf. Lambton, A. K. S., *Landlord and Peasant in Persia*, London, 1953. (以下 Lambton と略記) p. 108; TM p. 26)

- (11) K. M. Rührborn, *Provinzen und Zentralgewalt Persiens im 16. und 17. Jahrhundert*, Berlin, 1966. (以下 PZP と略記) pp. 115-6.

- (12) ハーッセ化を明記した記述が極めて少ないため、レヨールボレンの方法を踏襲し (PZP. pp. 118-121)、トゥール保有者としてのハーケムが廃され、中央政府派遣のヴァズィールまたはダールーガが統治の担い手として史料に現われた場合は、その地域がハーッセ化されたものと見なした。

- (13) 統治担当者とは、史料において、トゥール保持者としてではなく、統治に関わる業務 (主に vezārat あるいは hokumat と表記される) を司ったと見なされる者を指す。

- (14) PZP. pp. 115-6.

- (15) PZP. p. 136.

- (16) ヴァズィールが財政管理を強化したハーッセ地運営を任じられた文官であったことは、地方史料などに見出される任命勅令の記載など (ex. JM vol. 3-1, p. 176, pp. 182-3, TGF p. 173 etc.) に明示されている。

- (17) ダールーガは、警察機能を持つ職であるとされるが、(cf. Quiring-Zoeche, R., *Isfahan im 15. und 16.*

*Jahrbuch*, Freiburg, 1980. pp.139-145)、『その明確な定義は未だなされていない。本稿で扱うハーッセ地のダールーガもまた、当該地の治安や防衛を司る立場にあったと思われる (ex. TA ff. 110b-111a) が、その主な職務は徴税業務にあったと考えられる。ダールーガの異動サイクルは非常に短く (cf. 表II)、また請負い (ejäre) がなされていたという記述も見られる (cf. XT p. 891, p. 903)。この ejäre という語は金銭による請負い、下請を意味するという。ゆえにダールーガ職の任官は、中央政府が短い周期の請負いの形で行ったと考えられる。アッバースI世期の大半のハーッセ地には、ヴァズィール、ダールーガが共に中央政府から任命されており、通常は中央政府の成員であるヴァズィールが優位に立っていたが、ダールーガの強制力が重視される場合にはこの限りではなかった。

- (18) サファヴィー朝のゴラームは、グルジア、アルメニア、チェルケスなどの捕虜が主であり、奴隷が購入されていたことを示す記述は管見の限り見出せない。ゴラームを初めて本格的に常備軍として組織したのはアッバースI世であったが、こうした勢力の導入自体はタフマースプI世 (在位一五二四―七六) 時代から行われていたと見られる。

- (19) 羽田正氏によると、アッバースI世は、キズイルバシユ部族の内でも、自らに忠節であったコルチ勢力を優遇  
シャー・アッバースI世のギーラーン地方政策(一)

し、また忠実で傑出した者をコルチ軍に編入して増員し、ゴラーム軍に匹敵する常備軍を構成したという。詳しくは、同氏「シャーアッバースの改革とコルチ」『西南アジア研究』No. 23, 1984年, pp. 26-46を参照されたい。

- (20) Ostājī 部および Šamlū 部は、サファヴィー朝の初期から、トルコマン系キズイルバシユ部族集団を代表する二大勢力であり、ホラーサーンにおいて、即位前のアッバースの擁立を巡って争ったこともあった。

- (21) ゴラームおよびコルチの内にはトゥール保持者も存在したが、それ以外の者たちは主に中央政府を通して受け取る俸給によって生計を立てていた。つまりハーッセ地の収益が彼らの俸給になっていたのである (cf. TGF p. 232)。そのみではなく、彼らを主勢力とした王朝軍の遠征時には、ハーッセ地の収益がその軍資金として運用されてもいた。 (cf. XT p. 888, TAA p. 564)。

- (22) XT p. 889 またこの年には、ギーラーンとマーザンダーンもハーッセ化されたが、それらの地のハーケムであった Farhad Xān Qaramānū はそれに先立ってホラーサーンの大アミール (amir al-omarā) 位を約され (TAA p. 574)、『遠征に赴く』 (TAA p. 565, TGF p. 172)。

- (23) TGF p. 173 なおこれ以降「」は引用文中の筆者の補足を示すものとする。

- (24) ペルシア語史料においては、西ギラーンは *Biye pas*、東ギラーンは *Biye pis* と記されるが、本稿では明解を期するため西ギラーン、東ギラーンと記す。
- (25) TGF pp. 231-2.
- (26) ダールガが中央政府からギラーンの統治者として任じられたという記載はない。また欧人旅行者のデッラヴァレも、ヴァズィール統治である旨を明記している。(della Valle, P., *I viaggi*, (ed. F. Gaeta et L. Lockhart), Rome, 1972. (以下 della Valle. と略記) p. 167.
- (27) II-3-b で後述する。
- (28) ex. TGF p. 181, p. 190, p. 217.
- (29) 西ギラーンは *Eshāq* 家、東ギラーンは *Kiya* 家の王子たちが代々統治を行っていた。(cf. Rabino di Borgomale, H.L., "Les Dynasties Locales du Guilân et du Daylam", *Journal Asiatique*, No. 237, 1949. pp. 301-50)
- (30) *va xarā* のハーケムもサファヴィー朝に対して貢税(*bāj va xarā*)を支払っていた。こうした朝貢関係が始まったのは、東ギラーンの場合はサファヴィー朝建国当初から(TGF p. 11)、西ギラーンは一五一七/九二三年から(TGF p. 14)であるという。
- (31) たとえば、東ギラーンのハーケムであった *Xān Ahmad* は一時西ギラーンを占領したが、一五六六/九七四年タフマースプ一世によって捕われ、幽閉された(TGF p. 47, p. 52)。この折タフマースプの庇護の下で西ギラーンの統治権は *Eshāq* 家に戻り、*Jamšid Xān* がシャーからの任命を受ける形でハーケムになった(TGF p. 42, p. 53)。
- (32) TGF pp. 132-3, XT pp. 1089-90, TAA pp. 450-1.
- (33) TAA p. 451. なお TA には、占領直後から、東ギラーン征服軍を率いた *Farhād Xān Qaramānlu* がハーケムであったと記されている(TA fol. 95a)。
- (34) TGF pp. 152-3, TAA p. 497, TA ff. 106b-107a.
- (35) TGF p. 157.
- (36) TA fol. 89a 一五九〇年十二月/九九九年 *Safar* 月
- (37) たとえば della Valle. p. 167 には「ギラーンは古くからペルシアの一部と見なされていた」という征服に関するアッバース一世の主張が記されている。
- (38) cf. TGF p. 129, TAA p. 448 pp. 460-1, pp. 492-3 など。
- (39) アッバース一世は、東ギラーンのハーケム *Xān Ahmad* が首府 *Lāhijān* をオスマン朝に引き渡して軍事的援助を得ようと画策していることを知り、*Lāhijān* と首府 *ガズヴィーン* が近いことを懸念し、東ギラーン征服に踏み切ったという(TAA p. 449)。
- (40) TAA p. 494.
- (41) イラン中央部から旅してきたオレアリウス(*Olearius*,

A.)は、ギーラーンの農産物が豊富かつ安価であること  
を記している (*Relation du Voyage d'Adam Olearius en Moscovie, Tartarie et Perse*. Paris, 1659;  
rep. Paris, 1719. (以下 Olearius. と略記) p. 1008.)。

(42) TAA pp. 459-60 TA ff. 96b-97a.

(43) TAA pp. 544-5.

(44) TAA p. 564. pp. 570-3.

(45) さらにホラーサーン遠征の後、国家機能の拡大に伴った徴税・財政制度の整備・改革と財政管理強化が進められたことを示す記載が TAA p. 587 に見られる。

(46) レールボルンは molāzemān-e xāṣe-ye šarīfe の訳語として宮廷従者の語を用い、さらにグラーム集団や銃兵隊がハーッセ地の軍務に携わった記述をその根拠として挙げ、この結論を導いている (PZP pp. 129-30)。この解釈にはかなり問題があるのだが、ここでは詳しく触れない。

(47) TGE p. 130. 一五九一／九九九年の記述には、アッバースI世が、ギーラーンの道 (toroq va ša'bāt) や後背地 ('agebāt) が攻め難いこと (saxti) から、征服を懸命に躊躇していた (andiše va ta'āmoli dāšt) とある。

(48) Farhād Xān 率いる西ギーラーン征服軍は、逃亡した西ギーラーンの元ハーケムの搜索のため、Fūman の森林の難所 (jā-ye saxti) や岩藪 (pas sangi) を熟知して

シャー・アッバースI世のギーラーン地方政策(一)

いた捕虜の Bū Sa'id Mīr を釈放し、道案内をさせる必要があったという (TGF p. 153)。

(49) 時代はやや下るが、Olearius の一六三三年二月一〇—十一日の記述 (pp. 1016-7) を見ると、カスピ海岸沿いを騎行する際、同行者の内三名が馬と共に水没し、さらに六頭の馬が疲労に倒れたとあり、ギーラーンを騎行する困難が示されている。

(50) 東ギーラーン征服の際、Farhād Xān 率いるキズィルバシュ軍は、ギーラーンの森林 (jangal) での戦闘の仕方や習慣を知らなかったため、自ずと援軍であった西ギーラーンや Gaskar の地方軍兵 (sepāh) が陣頭に立って戦うようになったという (TGF p. 133)。

(51) TGF p. 86.

(52) TGF p. 109.

(53) 本稿 II-2-d で後述する。

(54) cf. PZP. p. 131 及び M. Payandeh, *Qiyām-e rarīb Šāh*, Tehrān, 1980. p. 41 及び 以下に記すもその解釈の根拠は示されていない。

(55) 西ギーラーン、東ギーラーンという漠然とした地名表記以外に見出されるのは、Rašt, Fūman, Šaft, Kūčes-fahān 及び Kohdom, Šekāl Gūlāb である。

(56) TAA p. 451.

(57) たとえば、TAA p. 593 には、地稅收入 (hāsel-e velāyat) を与えるに約して morajannade を集めた」と

いう記述が見られる。

- (58) TGF p. 20.
- (59) TGF p. 73.
- (60) TGF p. 190.
- (61) 一六〇〇—一〇一九年のアゼルバイジャンへの進軍の記述 (TGF pp. 190-3) が最後である。
- (62) ro'asā'-ye layyām TGF p. 267, p. 268.
- (63) akāber-e layyām TGF p. 228, p. 254.
- (64) layyām-e mo'tabar TGF p. 254.
- (65) TGF p. 228, p. 254, p. 283.
- (66) TGF p. 213.
- (67) TGF p. 213, p. 263, p. 283.
- (68) TAA p. 461 には、東キーラーンのセペーフたち (sepāhiyān) とは、Ajdar, Čopek の二つの種族 (tāyefe) があつて、そのセペフサーラル位 (sepahsālārī) および統治者代理 (vakil al-solṭane) をめぐって争つてゐたと記されてゐる。
- (69) たとえば、西キーラーンのハーケムがタフマースプ一世に召喚された際、セペフサーラルの Āqā Fūmanī nāyeb-e xod なる者や由の代理 (nāyeb-e xod) にまつたつた (TGF p. 31)。
- (70) TGF p. 42 Fūman のセペフサーラルは Fūman の町 (qasabe) の領有権 (darā'i) を有していたといふ。

- (71) たとえば地方政権時代の領土や覇権を巡る戦闘の際、敵側のセペフサーラルを自軍に取り込もうと画策するという事例がしばしば見られる (TGF p. 71, p. 103 etc.)。

- (72) Mīr Farrox Aškūlī なる者がアッバース一世からセペフサーラル位と共に Somām を与えられてゐる (TGF p. 167)。
- (73) たとえば、東キーラーン征服直後 Lahjān のセペフサーラルはホラーサーン遠征に同行したといふ (TAA pp. 451-2)。
- (74) 西キーラーンのハーケムとなつた Farhād Xān の指名にそつた形で任命が行われた (TGF pp. 157-8)。
- (75) 各地区に任じられた者とその俸給額は次の通りであろ。; Rašt ... Amir X' ānd Xān Tālēš (1100 トラフン) Fūman ... Bū Sa'id Mīr (1000 トラフン) Kūčesfahān ... Hājī 'Alī Xān (1100 トラフン) Šaft ... Mīr Hātām (1100 トラフン) Toulam ... 'Alī Xān Toulamī (1100 トラフン) (TGF p. 158).
- (76) TGF p. 173.
- (77) TGF ではこの運動の主導者となつた Kār Giyā Fathī といふ人物が、正しくは Kar Kiyā Fathī であらう。
- (78) TGF p. 175.
- (79) TGF p. 190.
- (80) たとえば一六〇八—一〇一七年には、ヴァズィール代

理の Behzād Baig がマーザンダラーンの冬営地にいる  
アッバースI世に謁見する際、セパフサーラルたちを  
伴ったという (TGF p. 184)。またこの Behzād Baig  
が正式にヴァズィールに就任し、Lahjān に賜衣を受け  
に赴く際も、セパフサーラルたちが同行している (一  
六〇九/一〇一八年 TGF p. 189)。

- (18) Šaft といふ Mir ātam の没後、その女婿 Mir  
Farrox がセパフサーラル職を継いだことが記されて  
いる (TGF p. 259)。

- (82) TGF p. 136 にて Fūman および Kučsfahān のヤ  
パフサーラルの死亡 (一六〇八/一〇一七年) の記載  
があるが、その後任者の記事は見出せない。

- (83) Mir Farrox の没 (一六一八/一〇二七年) 後、元セ  
パフサーラル Mir ātam の弟が父祖の官職である  
としてセパフサーラル位を要求したが叶わなかった  
と TGF p. 259 に記されているが、後継者の記事は見出  
せない。

- (84) PZP p. 131.

- (85) TGF p. 190 cf. 記述例⑥

- (86) TGF p. 188 なお Gaskar および Āstārā がハーッセ  
化されたという記述が TGF p. 181 に見られるが、こ  
の二地域にはアッバースI世時代を通してハーケムの存  
在が認められるため、本稿ではハーッセ地とみなさな  
い。

- (87) Behzād Baig はシャーに任じられた Gaskar および  
Āstārā のヴァズィール業務を自らの下僚に委託してい  
た。しかしアゼルバイジャンのヴァズィールは、この二  
地域はアゼルバイジャンに属すると主張して、Behzād  
Baig が任じていたダールーガや収税吏 (āmel) を捕え  
てしまったという (TGF p. 190)。

- (88) TGF p. 191.

- (89) TGF pp. 193-4 やらに翌々年罷免された (TGF pp.  
203-4)。

- (90) TGF p. 264.

- (16) PZP p. 131.

- (92) Gaskar のみは統治勢力が Tales から Čmī に移行  
している (cf. 表Ⅲ)。

- (93) かつてこの地域は Čopek, Aldar という地方名家の勢  
力が強く、彼らがしばしばサファヴィー朝に抗する行動  
をとっていたため (ex. TGF p. 169, pp. 195-7)、中央  
政府がクルド系のハーケムを任命して (TGF p. 171,  
TAA pp. 514-5)、彼らの勢力を抑えようとしたものと  
思われる。一六一一/一〇二一年までは Lešte nešā の  
ハーケムの存在が確認できるため (TGF p. 206)、ここ  
では一応ハーケム統治地域に含める。しかし TGF の記  
述にはこの地域に関するヴァズィールの強い介入を示す  
例が多く、中でも Behzād Baig 在職中にはヴァズィー  
ルによる土地の買上げという形でこの両勢力に対する強

制移住措置が取られたという (TGF pp. 195-7)。これに鑑みると Lešte nešā が漸次ハーッセに移行された可能性は強い。

- (94) TGF pp. 274-5, DhTAA p. 16, Olearius. pp. 1002-5
- (95) DhTAA p. 16.
- (96) DhTAA p. 16, XS p. 51.
- (97) TGF p. 264.
- (98) XS p. 51.
- (99) Tales は古来 Gilāni と共にギーラーン地域に遍在する山岳遊牧民であるというが、TGF で見る限り低地にもいくつか ales の居住区があり、この当時はほぼギーラーン全土にいたと思われる。Olearius. (pp. 1005-6) によると、Tales と Gilāni は言語の違いから相互理解を欠いていたという。そうした点や、動員しうる人数、地域的特殊性への適合などに鑑みると、ハーッセ体制下の Gilāni を牽制し、軍務を担うには最適かつ不可欠の勢力であった。

- (100) Āini と Sufi は、共に一／七世紀頃にギーラーンの山岳部 (主に Daylam) へ移住してきたと見られるクルド系の部族である (cf. TM p. 14 および Rabino di Borgomale, H. L., "Le Guilan", *Revue du Monde Musulman*, No. 32, 1912. p. 280)。移住以来しばしば独立政権を起しており、半ば土着化した勢力と見なしうる。TGF にはクルド系統統治者勢力と Gilāni の間に

も様々な軋轢のあったことが示されている (TGF pp. 273-4, pp. 284-5)。

- (101) Tonkabon の統治勢力は明らかにトルコマン系キズィルバシヤの一部族 Rūmlū に属する一氏族 Hešārīū に出自を置いていた。また厳密にはトルコマン系ではないが Tales 部族の Āstāra の統治者は、タフマースプ一世期にはキズィルバシヤの列に叙せられていた (TAA p. 141)。